

# 風しんについて

風しんとは、春先から初夏にかけてかかる人が多い感染症のひとつで、一般的に、2歳～3歳くらいの幼児にかかりやすいとされています。はしか（麻しん）に似た症状から、俗に「三日はしか」とも呼ばれています。数年ごとに流行する傾向にあり、昨年は近畿地方を中心に過去の年間報告数を大きく上回る大流行の年になりました。

風しんは、風しんに感染した人の咳やくしゃみなどで風しんウイルスが飛び散り、それを吸い込むことにより感染します。潜伏期間は2～3週間で、中には、ウイルスに感染しても明らかな症状が出ないまま免疫ができてしまう人（不顕性感染）もいますが、リンパ節の腫れ・発熱・発しんの3つの症状が特徴です。首や耳の後ろにあるリンパ節の腫れに伴い、微熱から38度前後の発熱、そして、色が薄く小さな発しんが多くの場合は顔から出始め、全身にまんべんなく広がります。発熱や発しんは3日～数日で治まりますが、リンパ節の腫れは1か月程度続く場合もあります。さらに、関節痛や脳炎などの合併症を起こすこともあり、大人がかかると重症化しやすく決して軽視できない病気です。

風しんは一度感染すると、ほぼ一生免疫が保持されると言われていますが、年月がたつと抗体価は下がってしまうことがあるようです。また、免疫を持っていると再度風しんウイルスに感染しても軽症で終わるとされています。

妊婦、特に妊娠初期の女性が風しんにかかると、胎児が風しんウイルスに感染し、難聴・心疾患・白内障そして精神や身体の発達の遅れなどの障害を持った赤ちゃんが生まれる可能性が出てきます。これらの障害を先天性風しん症候群といいます。先天性風しん症候群そのものに対する治療法はありませんので妊婦の方は風しんにかからないよう注意し、これから妊娠を望まれる方は妊娠前に「風しん抗体価検査」を行い免疫ができているかどうかを調べ、抗体価が低い場合は、風しんワクチンを接種して風しんに対する免疫をつけておくことが重要です。

風しんに感染した場合も、特異的な治療法はなく対症療法が中心になります。唯一の予防法は風しんワクチンを接種することです。（麻しん・風しん混合ワクチンもしくは、風しん単抗原ワクチンの接種）しかし、ワクチンの効果は一生続くものではなく、徐々に低下していきます。その為、追加接種を行い抗体価の再上昇（ブースター効果）を図る必要があります。

現在、予防接種法による定期接種として平成18年4月以降に1回目（第1期）の接種を受ける幼児からは、就学直前に2回目（第2期）を受けるようになっていきます。町では、今年度、保育所・幼稚園最年長クラスに相当する幼児（5歳～7歳未満で小学校就学前1年間の幼児）に個別通知を出します。定められた期間を過ぎて接種した場合は、任意接種となり接種費用は全て自己負担となりますのでご注意ください。

平成25年度 麻しん・風しん混合ワクチン定期予防接種対象者

第1期：1歳児

第2期：保育所・幼稚園最年長クラスに相当する幼児（5歳～7歳未満で小学校就学前1年間の幼児）